特別
へ13
4271
38
特別
へ13
4271
37

うなみ八犬傳 二十編

上帙

特別
へ13
4271
37

へ13
42-71
37

假名讀 八犬傳 二十編

曲亭琴童作
一勇齋國芳画

文溪堂板

91-2280

月雪花の名所へ人多く集會して。詠る中に雅俗あり。詩歌文章三弦酒宴數へ見るに雅多く少く。俗多ハ。邵に多し物の本を著すものも。此大江戸の文の華。詞の林に分入りて。流行を競ふもの。日に新に月に昌也。大声里耳に入らぬとやらん。さるべきもの書原本も。流行今昔無比なるに合巻に綴りてより。いよく婦幼に流行ぬと書賈の告るに實や。雅俗その品多ろれども。俗なる方八人間へ及ぶもの早き代知るべし。されバかるよみ八犬傳今年も既に廿編の抄錄終り〜 机の上繙く書に名所を捜索ねるんぞ新奇なる序文ハ。いつと考へ見ても思ひ泛ぬ下るの筆鉾喫煙の間雅俗を雜へ〜 謾言の序ら〜にて千代ッと述ぶ

嘉永六癸丑年秋稿成
同七甲寅年初春新刻

八犬傳 十

曲亭琴童誌

節婦
濵路昊

木作養女
濵路姫

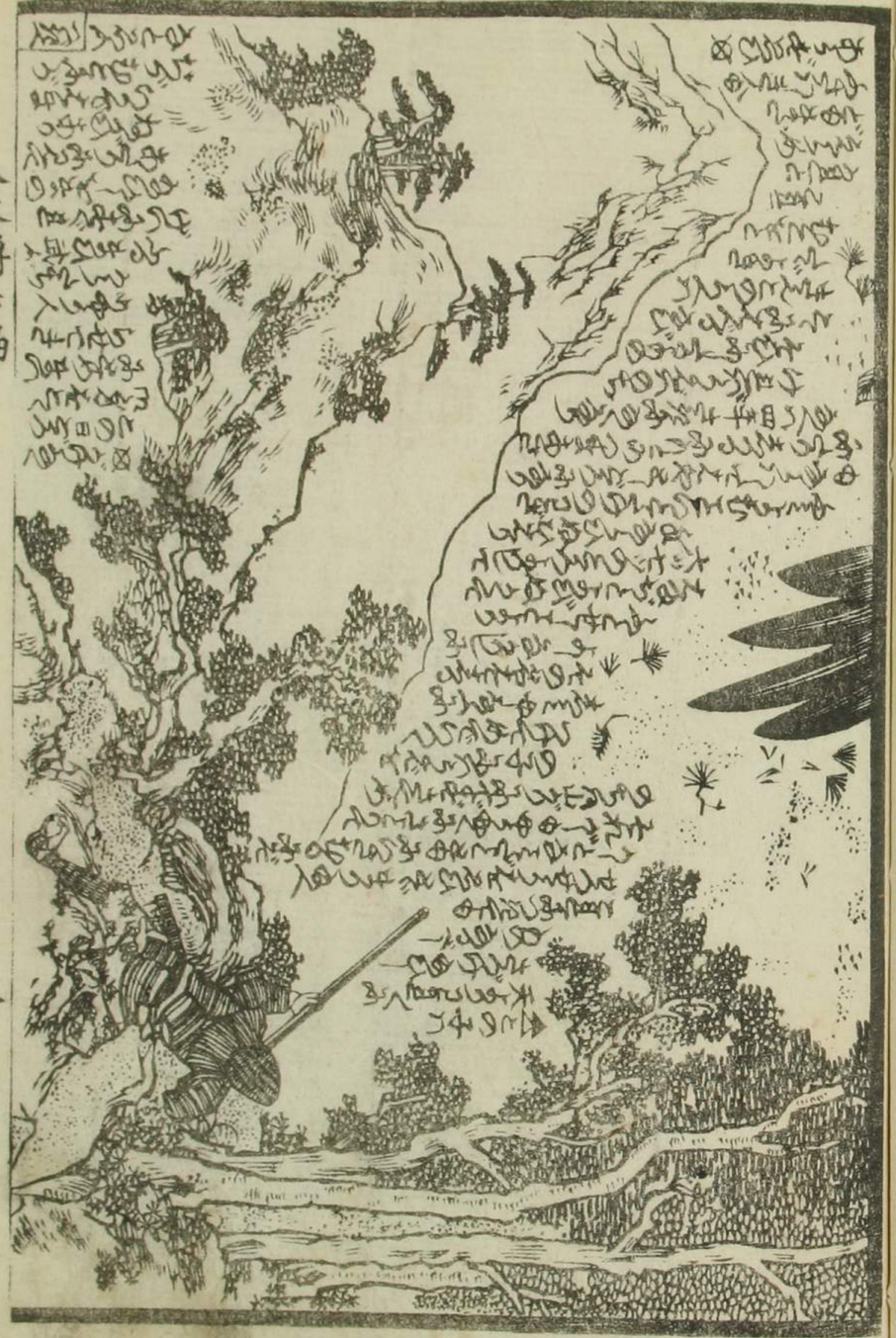
八丈作井紬
真

濱

信

出
夏
木
濱

信



琴童抄錄

國芳画圖

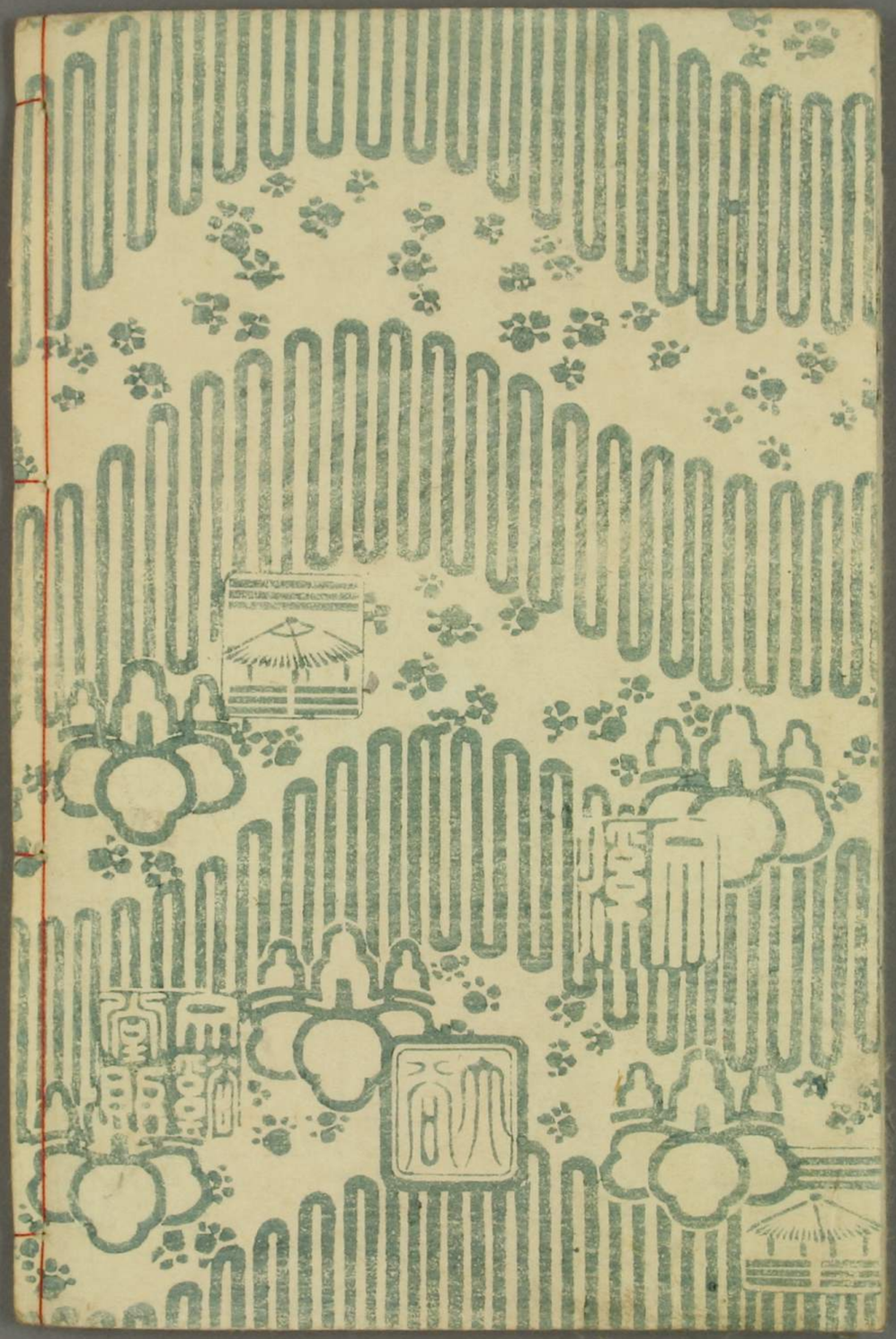
下の巻へ

此草紙は後の代百銅

朝さくら

一名江戸市川香

江戸大傳馬町二丁目
賣弘所 丁子屋平兵衛
東都
調合所 鷄舌舘製



特別
へ13
4271
38

假名讀八犬傳

二十篇

曲亭琴童記

一勇斎國芳畫

文溪堂板

91-228

上の巻より

その夜たまのハ
ちゆうかつるの
りるものの
めげらくけづ見る
るこせいたぞかこ
さぐけるみちと
ものみさろのり
あそなくなまえんをもも
みまるにみさりとらま
すぐらんをまろれとも
ちく作のいみめく
ふびぶろーきをらち
ひくきてきぬをさらく
たろまをつけて村雨おろ
なをとうふあろぐんの
せをふちりもいたつ奈
四らふさのもしいをまりみ
そのせれちろみぎをまむい
はべるのいとくるれたな
ゆりうとくるふこひまく
むはとも信ろいりいく
ろうくさりてまろうみよも
らまをうさらみうをを
まをくうくまいまあちゆり
せんさのこうこをきーとさ
ぶげいのみをとるけーき
みけまべる四らハ▲

▲ろよりふさうぐくてみびての用心
らもちぶひさるそのきたをそろり
ろみーうべいとあるくらちけに
ひとまろ信乃をらやまいけり
まるみどおむく作ハとうみの
さろるふまたつくーんをそく
る四らみめさろぐきをまゆまる人
まを内丸内丸内丸内丸

▲つぎのまくうびのがーて
てきみをまひてのーに
さけくらちのまをとびど
ちるみ宮の日をまる
らうをそろうくに
あまるこのそりーび
をくらしてのをう
まをちく
ねーどう
をまび
あーも
をへ紀ハ
ゆー
ちをく
ちをら
ちをく
ゆ四ろハ
ひとり
ちゆう
むみ
さんと
きをびるびきか
あうをゆち
さ紀ふさちて
をんろハのをとをみ
をちらどひいゆる
夜をまちゆ
霊ろのつまを
信乃みゆ
つぎ

八犬傳七編

つぎをそべらんさる
かのふかさとへとき
のせつてゆうつを
いさそていゝや
まてよひ
まなとろ
よりそれ
あなふとぞ
せうんと
いひつゝ
ゆたかへ
ぎいおん
今のつさめ
ふおわる
べーらく
のぞきせ
あからやとてとぞ、
さうくまれや
まいむく作さる
とうおづれてそゞ
まて作まくして
ゆゞてあやくあよを
たちのでけりさる
それむく作ハ𠮷四郎
ゞあやくあよかいそいて
あらゞくあとみへぞ
𠮷四郎ゆゞでのまゝ
おもふよびいるそこへ

めんまるみかゝるてよらのや
あつかけんなる内々や内
きうじあつて毎くもさけ
そんまてめけりあるらく
あて𠮷四郎へかくゝのあのゝ
をあいぞうーとなく作ハ
さてゆくゆうそともかゝれ
あるゞよく守そのころもの
信楓のみぎりをつまぎ
いそ子まーかゝさをもとハ
よりうれなぜのところへ
あくそまつゆうの希ー
うろぬめゝむまあなを
そうとそちんでうけハ
ひあらせよとひそうハ
おそれせきをらけそまつね
よりそくあんをふぐるまのハ
こゝのゝむすめごとそまおつと
ゆうんいきりゆうとのひが
あ人とのひ世のひゆうおんハ
く見なのごろうてまくバうそう
おんよろこびあきうるむらく
をみあゞぐときこえまゞりしめ
そのなきぢをまゝらせよ
とけきてもおんせんござ𠮷
ころえ手くあつてをとての人で
こらずあやくーよまでおくうときれ
よるのれきつふあつのめるとまをと
あゆうふときとあゆせなむく作

▲さてあれをそれのとらうをそろ、けーなぞみてかのひゞけのかたあんるゆびき心をよきまぢをめさうてとの一ちぞう二月も生えるさうらるくゆ人どもかるたゝまをハ犬づか信乃とうえんをおむすびくいまごひぞうからよつらゞゞめのあんなるゞゞぞ十かしくつみまつらぞこのよりきこえあげあへとのゝせもえきを𠮷四郎ハまうこそのくうてらしこ在のふとちのゝ犬づかむく作そのあつてうけりのらう人この村の信乃ハもとのゝうちらくそくのあゆかなぬふ宿ちゆくそくのそぞんわうとぞヤーしてけハ

▲さるべきやもまがヴー六そまびしがあんらけをやヤせーハ今くゝろいさぶりとやいのでゐあべゐんおうゞ三ツ家のそみあぞごうがなゝべこのつみそのゞ𠮷ぐゝおあゆきをあるく人よりかふなやとふとぞハまふ人つけあつうあうりまハ力をいゝふにわとせざきゞのむく作へちつとゆうまで

つぎへ

奈

を
か

出
信

夏
滑

夏

を

曲亭琴童抄錄

一勇齋國芳画圖

つぎき

家傳神效湯 諸疾病集 一包代百銅

熱病の良方 小兒の良方 婦人の良方 眼目の良方 其他 一包代五分

精製奇應丸 大包代金參朱 中包代一分 小包參拾文 不仕

熊膽黑丸子 一包代五分

婦人の妙藥 一包代金參朱

製藥本家 信濃町 瀧澤氏

弘所 元飯田町中坂下 大沢氏

御 小兒 免 主藥

のぞかんちゅうとう

武州埼玉郡加須町

大和門司法橋製

壹包 代二百銅

半包 代百銅

小包 代五十銅

武州埼玉郡加須町

たんきやくぜんそくいんのくすり

大和門司法橋製

本 りういんたんきやくぜんそくいん

各 留飲頓胸散

壹服 代百二十四銅

功能畧 ▲たんきやくぜんそくいん ▲ぜんそくいんたんきやくぜんそくいん

▲たらたらたきまりたり▲きぶりで▲つれとときぞ〜〜▲むねやけ▲ちらくすはぶ
はのくさ又はたれ▲むねもくふくちうのきをあ〜く▲ちくりわおちつ
のどむねふさがりどうれおどり▲ちまつの成ちき▲つはちうちちぐらうき
▲ムしのまわり又ちかさこりいさき▲前症の外もぞく飲食ちりのもぐましハ
留飲とるけらもり不断うまり断て過飲食ホの毒を除ぞ疾積ム氣
留飲乃症をうまとひざるるもうしぐへた〜〜

上方筋賣弘所　大坂心斎橋筋博労町角　書物店　河内屋茂兵衛

関東筋賣弘所　東都大傳馬町二丁目　書物店　丁子屋平兵衛

諸國取次所

京都堺町通六角下ル町　吉野屋勘兵衛

大坂松屋町通本町角　平野屋甚右エ門

江戸日本橋室町二丁目　鐵屋八右エ門

江戸横山町二丁目　松本屋長藏

江州八幡寺内　納屋嘉兵衛

上州相生町一丁目　石井五右エ門

下総佐原稿本　正文堂利兵衛

同難波新地文相生二丁目　播磨屋吉六

奥州仙台七町三丁目　熊谷屋善兵衛

羽州山形八日町　河内屋近兵衛

貴賤男女橋の業うも更ゆ有の人の
代とある世るゆ鄭ゆ元特製極ゆの山彩の業北粉の水
夏月ゆ中けぞ冬一つのくびぞ肌月成細ゆ白彩のようのるゆ系
きうゆう元ゆ業延ゆ法ゆさ孫ゆ硝ゆ徳利ゆ

白の業花橋　代六十四孔

花橋

酒ハよく機活運動を助ゆ業を発く最上ゆれ
帰ゆ元ゆ動ゆ酒ゆど脈ゆ中ゆアの破今月ゆ今月の
酒又晨ゆ大宮酒酔の脈痛痒光の併業を用ゆる
元ゆ春の元ゆの氣ゆぞく迷ゆ酒毒を消ゆ併業ゆ

梅の雪　代七十二孔

梅の雪

御免　ぞのかんの業　一包　百五十銅　半包　百十銅　小包　五十銅

小児万病のゆ中ゆそゆ体ゆるゆ和ゆさゆ
ゆ〜〜〜元ゆ元ゆる元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ

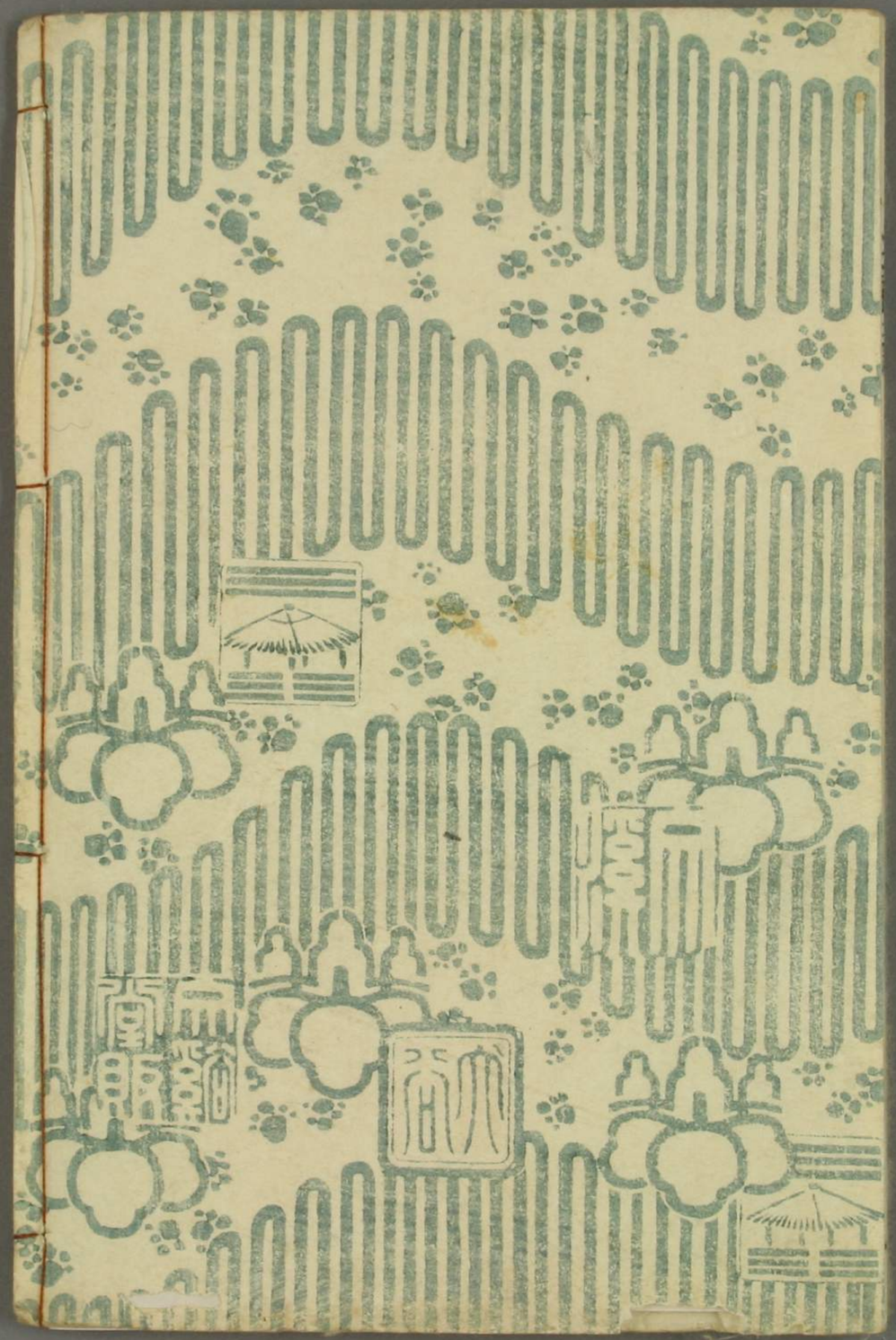
大和門司法橋製

なんまあ　ぞりあんの業　一貼代　百九四銅

なんまあ〜〜ゆんゆゆ元ゆる人法ゆゆ用
ひ〜元〜元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ
ゆ〜げんきゆ元ゆのゆ元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ

江戸大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛

文溪堂



玉石雲美八犬傳

二十編

曲亭琴童作

一勇斎国芳画

文溪堂

應齋小亮